

「福祉・考」

山口 信 治

一、はじめに

久しぶりに胸のつかえがスットとおりたようなそんな短文にめぐり合うことができた。しかもこれが公けにされたのが四十年まえというのだからなおさらいたみいってしまった。それでいて今日われわれが読んでみて決して「古めかしさ」なんて感じさせない、むしろその内容や感覚といったものは現代的と言っていいほど、驚くべき洞察をもったものだ、それにもう一つわたくしにとってこれは光明とでもいいのだが、一種の目覚めのようなものさえ感じさせてくれるものとなった。

さて、これ以上、くどくどわたしの感想などやめて早速その一節を紹介してみることしよう。

「殊に今時は全国社会事業の清算期であり、特に宗教関係の社会事業の自己批判を下されるべき時である。信仰なくしては何の為の宗教社会事業であるか。財乏しく設備悪しくとも真の喜びと親切と同情があれば行つてゆける」またさらにその事業が浄土的なものとなるために彼は次のようにも言った。

「これは注意深き看護と慈愛とによって完うされるものである。例えば病院の仕事でも信仰なきときには誠に惨めなるを感ずる。医療薬品があつても、それのみでは救われない、信仰ある同情によつてのみ病を治し得るのであ

る。浄土宗の社会事業は設備に於いては他のそれに劣つてもよい。患者は同情ある救護の力となるだけでもその事業は大なる力となり得る……。」と。まことに大胆な、

しかもわれわれ福祉プロバーにとつて、まことに耳のいたい、また素直に言つて意表をつかれた感じさえするものだ。

一言でいってわが国の社会福祉の現代化とはこれまでの慈善事業とその精神主義とから脱皮して新しい装いをもつた福祉へと現代化しようとして、西欧社会のそれを範として求めた。したがつてまたこの福祉原理は人間理解からはじまつて人間理解に終わるという、徹頭徹尾その人間の自覚をステイタス・シンボルとしながら發展してきたのだ、ところがその結果は人間不在であつたり疎外という反人間的なものをかりとることになつてしまつた。つまり余りにも技術的、診断的でクライアントのもつニードを適格に知り、かつまた治療に必要なデータを提供してくれたが他方人間の喜びや救い平安というものが保障されなかつたという反省めいたものが抬頭しはじめている。

蛇足だがこうした折、先のご説を拝読した際、これを口

にして咀嚼してみると妙に味わいのするものということが分つてきた。

ところで、一体だれがこれ程まで真髓を洞察したのだらうか、これを明らかにしておきたい。

これは昭和九年、浄土宗務所社会課が出版した「浄土宗社会事業年報」(第一輯)なるもので、そのなかの「浄土宗義と社会事業」の一節からの引用である。その人こそ推尾弁匡先生である。わたしにとっては一面識さえないこの氏のご説であるが、胸のつかえを取り除くのに余りあるものだったことは先にも述べたところだ。

この書物はわが浄土宗系の社会事業を知る上できわめて貴重な文献であることのほかに、われわれ福祉プロバーにとつてまことになじみ深い先生方のお名前や論文が連らなっていることだ。たとえば先日大往生された秦隆真先生やこれまた亡き人となつてしまつたが長谷川良信先生、それに浄土宗の社会事業研究家として先駆者矢吹慶輝先生らがそれである。ところがそれ以上にわたしを驚かせたのが、今のべた推尾弁匡先生のご説でくりかえすまでもなく傍線の信仰、云々の部分である。

彼のことばはどれひとつとってみても、みなグサツときもをえぐられるようなものばかりだ。しかも四十年経た今日でもなおかつ現代的なダイモニオンの声として、「信仰ある同情」というご説は一つには「財乏しく設備悪しいえども」これによる働きと、もう一つに「医薬品があつても、これ（信仰ある同情）がなければ人々は救われない」病が治らないのだという二つの宗教社会事業本来の特徴を指し示したものと考えられ、私自身大きな内省として深くここにとどめそれを味わってみたいものだ。

二、なおひとつ欠く

思うに胸のつかえがとれたというのはまさにこの彼のことばの受容つまり咀嚼と嚥下に他ならなかったのであらうし、したがってまたわたしの心境の変化によるものだと思う。ところでこの心境の変化だがわたしなりの心境を告白するならば、そのひとつにプラトンのシンポジャからの引用文によつたのではなからうか。「精神の眼は肉体の眼がその鋭さを失おうとするとき、はじめて鋭くものをみはじめる」という。まさに老いの心境で悲しくもまたうれしい

心境の変化だとおもうようになった。

日頃、あまり仏教信仰になじみのないわたしにとって、仏教を論じその現代化を論ずることなど正気のさたとは思えない、にもかかわらず原稿依頼にふたつ返事で承知してしまったのはなぜだろうか。

さてそれだが、先にのべたプラトンのいう肉体のおとろえによつてはじめて見えはじめた新しい視力とは、今日の誇るような高福祉社会を支える信憑性の高い診断や、治療技術が、果して人類の幸福に貢献しているだろうかという私なりの反省だ。つまり言い換えれば人間本来の生の悦びとか、たましいの救いの問題である。むしろ逆に技術革新によつて新しく開発された治療体系は、たましいの安らぎどころか何ら救いようなない視界〇という状況にまで脱落してきているのではなからうかということだ。

たとえば、先の本紙創刊号にのつた、芝崎真悟氏の論文「ボックリ信仰」だが、はじめ調査に同行したわたしには単なる老人たちの大衆行動としか見えなかったが、次第に山あいには散在するこれらの寺院に集まる人々は、その途中にある福祉施設、老人クラブや老人センター、医療機関な

ど横目でみながら、なにものかにつかれたようにまた一心にたましいの平安を求めて足をはこばせている光景に移った。

たしかに有閑階級のマス・レジャーの性格を持ちながらもひたすら求め続けている生の悦びの求道者たちなのだ。氏の報告にもみられるように、単なるしも（失禁）のおそれに対する都合のよい予防というよりは死の準備とみた。

いかに死ぬかということだ。つまり、しもの世話になりたくないということより、愛する者からの世話を絶対に受けたくないという願望がその裏にはかくされていることだ。

さしずめ、わたしが問題にしたいところは、こうしたボックリ信仰が単に自分の死の準備だけに止まらず、その社会性に求めたところだ、つまり具体的な人間関係の改善になるが、調査にあたつて様々な予想を立てたがどれも適中しなかった。それというのは寺院に集まった老人たちの家族構成で、当然独りものの不安からこの層の老人が多いに違いないとらんだのだが、これは一割足らずで、そのほとんどは理想的なイエの住人たちだ。その座も親、子、孫という三世代からなる老人たちで、何不自由のない老人た

ちなのだ。

一見このばあちゃん文化とも呼べるボックリ信徒たちは、宗旨宗派を超えて新しい人生の出会いを経験することにもなる。無限に開かれた人間関係ということになるが事実、これによる友愛が芽え互いにいたわり合いながら真実な生き方を求めようとしている信仰者たちも少なくない。

そこで具体的な人間関係の改善をどこまでこの死の準備としての信仰が役割を果たしたかを社会学の集団理論だが準拠集団、どの集団に自分のところを寄せているか、をわかつて若干の報告をこころみてみよう。

さてこの準拠集団だが、理論的には二つあって積極的な準拠集団と消極的な準拠集団とがある。ところがわたしが今問題にしようとしているところはどの集団にも関わり合いをもたないでふわふわしている境界人がそれだ。彼らは等しく自分が誰れかを知らないのだ。そうしてどの集団にも所属しない自分に深い *Who am I?* としての心の奥底の苦痛を訴えることになる。これに類する心理的苦痛を持っているもの達がいる。さらには、その心の寄りどころ

が、現実には息子夫婦に養なわれ孫たちにかこまれて何不自由なく生活しているにもかかわらず、戦争で失くした長男の霊と関わりをもち深く心をひらいて交わっているもの、また先立ったおじいさんやおばさんの追憶に生きようとしている老人たちなのだ。どんなにその置かれている立場が恵まれていてもその心のなかはそこにはなく、心は自由に自分の求めるひとを訪ねて交わろうとするのだ。こうした心理的病理のうつしを持つものが少くない。

これを除けば残りの何割かの老人たちは、嫁との関係や、息子夫婦に改善がみられ感謝のお礼に来るもの、持病がいえこれがもとで地域のオピニオン・リーダーとして活躍できるようになったとか様々である。

やゝ脱線したきらいがあるようだが、範道を修正して「信仰による同情」に戻して考えてみよう。ところで、わたしはみなさんから大担しすぎるとか、軽薄すぎると叱咤されるかも知れないが、先に述べた肉体のおとろえによって見えはじめる新しい視力と、これによる社会福祉事業とりわけ仏教社会事業のそれは古くて新しい課題にアプローチするために、「なおひとつ欠く」というバイブルのこと

ばに注目したい。これはマルコー〇ノ十七——二二、にもつくもので「イエスが道に出てゆかれると、ひとりの人が走り寄り、みまえにひざまずいて尋ねた『よき師よ、永遠の生命を受けるために、何をしたらよいのでしょうか』」こう質問した若者は非常な財産家で、社会的にも高い地位のある者だった。心のやさしい若者は「師よ生命を受けるために……」と熱心にキリストに近づいた。ところが彼に生命を求めてきた若ものに向って「あなたは足りないことが一つある。帰って持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさいそうすれば、天に宝を持つようになる……」と言われたのだ。ところがあまりにも大きな犠牲のため若者は立ち去ったという物語りだ。

まさに今日の仏教社会事業は推尾先生のいう「信仰ある同情」というのは、バイブルの「なおひとつ欠く」というものではなからうかと考えたからだ。

三、信仰による同情の人

——アーノルド・トインビー——

英国は社会事業の宝庫としてその歴史的意義の大きい、

C・O・S・フェビアン協会はもとより、十九世紀のクリスチャンによって展開されたセツルメント・ムーブメントは目をみはるものがある。すでにこの種の事業と運動についてはW・ピットによる名著“Toynbee Hall and the English Settlement” Movement, 1914. ならにわが国の研究者では大林宗嗣、海野幸徳、小島幸治、佐伯裕正、生江孝之、長谷川良信、志賀志那人らによって概括が紹介されている。また志賀志那人らによる大阪天六に開設した大阪北市民館、下寺町の愛染園（大正六年）、大阪府沢部隣保事業・当時東京府豊多摩郡淀橋町柏木にあった有隣園（明治四十四年八月開所）、神田区三崎町の三崎会館（大正四年一月）、神戸葺合新川（大正七年八月）、さらには帝大教授末弘巖太郎博士を中心とする大正十二年六月オープンした東京・本所抑島元町。我国最初の大学セツルメントなどのセツルメント事業はトインビー・ホールに端を発しているのだ。今わたしたちにこの英国セツルメントを一言で評するならば汗と信仰（いのり）の結晶といっている、さしずめその先駆者キャノン・バーネットをはじめ三十数才の若さにしてこの世を去った、アーノルド・トイン

ビー（一八五二——一八八〇）の献身的な働きを抜きにしては語れないのである。彼は今世紀活躍している高名な歴史家A・トインビーではない。ただ経済学の領域で知る人ぞ知る程度で彼の著書「英国産業革命史」が代表作だが「産業革命」ということを始めに用いたという人物である。この彼の人柄をきわめてよく伝えるものとしては、貧民街では人々（労働者）貧民を前にして講演したその一部から、それをくみ取ってもらえればまことに幸いであるしかも残念なことにその講演の（経済学）のち倒れ、家に運ばれる途中息を引き取ったのだと言い伝えられている。

「我々知識階級は諸君（労働者階級）を無視し、愛情の代わりチャリティと役に立たない忠告しか与えようとしていなかった。この我々の誤りと罪をここに告白し、諸君の赦しを乞いたい。諸君が我々の誤りをゆるしてくれる否とにかくかわらず、我々は生涯を諸君に捧げ、仕える所存だ、我々に社会的地位も名誉も求めない。唯、諸君の信頼がほしい……。」云々と

まさに死をかけた壮烈な遺言のようにも似たこの彼らへのことは、生涯を通じて立派に証しをたてた彼の信念自

叫にうらうちされているものと思う、即ち、「人生において到達せんことを希う位置は正義を渴望しつつ一生を終る人、それである。」と、したがってまたその人柄は貧民の口症ら彼に対する評価もあながちうそではないと思うが、「われわれ貧民や労働者のもっとも忠実な相談相手だった」と言わしめたのである。

先のピビトの書を胆念に読んでいくうちに英国のセツトルメントが当時イースト・ロンドンに群がる宿命的な貧民に対して、最早物を与えることによって人間救済への条件としようとするのではなく、むしろ「こころ」、これはきわめて抽象的だが人間復興への最終救済となる精神の回復をねらおうとするものだと言っている。こうした高い理想は先にあげたトインビーによって「貧民の友」運動が展開され進められていった。ついに全生涯を献身したA・トインビーの名は英国のセツトルメントの建として今日もおコマーシャル通り二十八番地に当時の赤レンガをとどめるトインビー・ホールとして開館されているセツトルメント・ハウスだ。ところで大変興味あるところだが、彼のこの運動を支えた原動力なりその精神であるが貧民に対する宗教

的倫理(キリスト教的ヒューマニズム)に根ざしたアガペーの止揚実践だと考えることができる。しかもその基底に流れる人間観は、人格を有するもの、またその人間の認識の前提に可塑性という人間社会福祉の原理を確固たる信念として持ちあわせていたということだ。ならばこそこの運動のモットーとまで称される“not money but ourselves”も、アーチビシップをして言わしめた。“the story of a great adventure of friendship”も難なく受け入れられるものだ。

さてこの献身的な足跡を一目みたいというのが長い間のわたしの念願であった。今春ようやくこの念願が叶い、ロンドンのヒースロー空港に飛んだ。その夜わたしを歓迎してくれたのはオックスフォード・サーカスで白人と黒人のうち合いがあり双方に若干の死傷者を出すというすきんだものだったが、翌日久しぶりに晴れあがった青空のもとイースト・ロンドンにトインビー・ホールを訪ね歩いた。多少本学父兄会報に載せたが、白昼どうどうと街角で少年たちがタバコ、酒、麻薬、セックスといった目をおおわんばかりのしゅう体に体がこわばる思いがした。ようやく親切な

黒人に案内されてトインビー・ホールに立つた。コマージナル通りとホワイトチャペル通りの四つ辻の角に九十年の伝統と歴史をもつ赤レンガの建物が目に入った。その壁に向って日なたぼっこをしている無気力な多勢の黒人少年とその老人たちが印象的だった。今日でもなおかつトインビーの精神は逆効の学生たちによって生き続けているのをまの当りに見たのだ。

四、要としての二著

そのひとつは、P・A・ソローキンの *A Long Journey* (はるかなる旅とでも訳しておこう) だ。それにもうひとつ、H・ミューラー・エックハールドの *Die Krankheit nicht sein Zu Können* (病になったことができないという病) だ。先の「はるかなる旅」はP・Aソローキン博士の自叙伝といえるもので、彼を知る上できわめて貴重な文献の一つだが、それ以上に晩年「愛・エロスとアガペー」について述べたものがあるが、これを理解する上で欠かせない書物だ。何故ならば晩年のそれは、愛を彼は二つに分けて、愛することによって彼のもつ価値や社会的地位の利

益にあずかるうとする一つの形態エロスと、さらにもうひとつの愛は、相手が愛するに価しない者であろうと那些人々を、愛することによってその者に価値を見い出していうとするような形態アガペーがあることをのべた。さし当ってこの後の愛つまりアガペーであるが、きわめて示唆に富んだ洞察だと言える。

したがってわれわれ福祉プロパーの専門性「信仰ある同情」とはこの類いの人類愛に裏うちされたものであること。これが一つの要とならねばならないと考えたからである。

枚数の都合でその概略しか述べられないのが残念だが、この本は彼が三才のとき北ロシヤのヤレンスキー区の農家の一室で母親を亡くしたところからはじまる。おまけに妻を亡くした父親がアルコールに身を落し、これに伴う狂暴と発作とが幼いソローキンの心を傷つけたためた。この中毒の父と兄弟二人が仕事を求めて旅まわりをするが、きまった家もなく、休む家庭すらなく野宿をしたり、路で夜を明かすことすらあった。村についても食物にありつけずひもじい日々を暮った。

だがそれ以上つらかったのは数週間滞在しているうちにその土地の人々ともなれ、せつかく顔なじみになったところ、そこを立ち去らねばならないことだ。新たに出来た友から突然ひき離されること、そうしてその別離の悲哀、それに次の村での不安がいくえにも彼を苦しめたのだ。

「こうしてコミュニティーに属していることの心理的な孤独感と結びついたこの種の不安はつらいものだ。晩年私は社会学者としてこのような状態から自殺や精神障害をひきおこされることを知った……。」

なお彼の青年期についてはその七・八章で述べているが、教師養成学校に入学した彼は、当時のワァーリスト革命の熱心な支持者として、また社会革命党の学内指導者として活躍した。その間いくども投獄されるという経験もあって学校を去り社会運動家として農村で活躍することになった。その間一九二二年、ドクター論文「社会学体系」を仕上げたが皮肉にも、その年コミニスト政府より追放、外国に亡命することになった。こうした転々とするなかで彼は独自の体系を、つまり哲学、社会学、心理学、倫理学及び価値の統合的体系と呼ぶところの理論を樹立することにな

る。しかも先に述べたようにそのエネルギーはまさにそうした苦境（ブラチメント）のなかから養い育てられた価値なきものを愛する業である。

次いでミュラー・エクハルドの「病いになることができないという病」について概略述べることにする。

この書物はエックハルドの「病気」のもつ意味について定義づけたものだ。この彼の考え方は従来の西欧医学にある反省と、新しい指標なり、哲学を支えようとするものだといっている。また一種のパラドックスを潜ませ、従来の医科のもつヒューマニズムがむしろ非人道的なものとなつてしまっていることを指摘している。

いまその内容について立ちいたしてみると、その序章「もとに帰るすべなきこと」の部分では、病いが身体を守るかくれみのであったり避難所となったりすることを挙げ、体全体が一種の代理者として魂の病気を引きうけていることを指摘した。また現代医学では病気が一般に意味のないものという考えから、病原菌をつきとめ病気のもつ苦痛をできるだけ早く取り去ろうとするもので、その病気から真の人間性を回復しようとする可能性をベイシエントか

らうばい取ってしまったといっているのだ。では一体、彼は健康をどう考えていたのだろうか。「本来病気にかった人間」をいうのであって、従来の機能論的な理解に対して新たに人間学を対立させたものといえる。

人間が播いたものを今また刈りとっているのである。今述べたように人間の本質と関わり合う科学はつねに「科学性」という魔もの」をもち人間的な人格から遠く離れた方法で人を理解し知ろうとしているのだ。この限りにおいて科学は死の範疇のなかで考え、我々の目に見えるつまり測定可能な直接的な観察の方法といいいい。こうした人間がものにまで低められ、ついに人間の魂の性質が無視されるに至ってしまったのだ。この人間の状況をベルナノスは「悪魔の太陽の下で」という本のなかで、「虚無における慰、孤独でしかも氷のような冷たい平和」だと言った。まさしくこの医学もまた人間を物理的・化学的に考察するということあやまちを犯し人間がなぜ病気になるのかという人間の問いについては未だ解答が出されていない。一般に病気を身体的存在である人間に偶然的な障害と考えて、人間の身体を支配する科学つまり自然(物)科学の方

法によって説明しようとしてきた。解剖、生理学などはこれによるもので、ものとしての病はきわめつくされているのに人間のものも一つ一つの存在である魂としての実在は無視されている。こうして医科学は病いが何ら意味をもたないもののように、その治療も味けのない無意味なものとなってしまう。これでは決して病いが治ったとは言えないのだと主張する。たとえば病いが治った状態でもやはり救われないままの病気で今日文明病とか神経症さらには *non disease* (無病症) などの障害が増大しつつあるのもこうしたみかけの健康は単に化学療法による無症状ということになる。これまた一種の病気だというのだ。

五、現代における社会福祉の究位

学問の知識がどのようにに社会の側からうけ入れられるのだろうか、これを最後に考えてみよう。

よく引き合いに出されるのがアリストパネスの喜劇作である「雲」だ。この作品はギリシャの哲人ソクラテスの経営する学校とアテナイに住む馬道楽の一人の息子とその借金におわれる父親が登場する楽しい劇だ。息子の借金で首

がまわらなくなった父親が息子にソクラテスの学校に入れて、借金を返済しなくてもすむような弁論術を学ばせようとした。ところが当の本人は親の意に反して青い顔をしてなんだか分らぬものを勉強するより、馬にのってさっそうとしている方がいいと言つてなかなか学校にゆこうとはしなかった。仕方なく父親がまず学校に行つて勉強するがさっぱり、再び息子に学校にゆくように口説いたのである。

ところが止むなくソクラテスの学校で覚えてきたことというのは、父親とけんかしなぐっておきながらそれがいかに正当であつたかを論証するのに利用されてしまった。これに怒つた父親がこうなつたのもソクラテスの学校のせいだとして焼き打ちしてしまつたというものだ。

どうやら作者の意図がソクラテスの学校がなんら役に立たないインテリゝの集りにすぎないことを皮肉つたものだし、雲を食つて生きている連中への痛烈な風刺でもあつた。わずかに役に立つのは法廷での弁論ぐらいでそれほど社会には役に立っていないというのだ。このようにして學問と社会との關係は社会の幸せの実現に直接関わり合つていうよりは対立する場合がしばしばあることだ。差し当っ

て、われわれ社会福祉プロパーにとつての學問の社会に対する使命は單なる知識の集積ではなくその知識の利用にあると思う。この知識を使うことのむずかしさをギリシャの哲人ソクラテスは、どんなに多くのことを知つていても、それが即賢い人とは言えないことをわれわれに告げてゐる。

「もしも、人が地上のどこかを歩き回つて、どこにいちばんたくさん金が埋蔵されているか、どこを堀れば金が出てくるかをいかに知つていても、それで人間が幸福になれるかというところは、そう簡単にはゆかない。……またたとえ伝説のミダス王のように手を触ればすべて金になるというような仕方でも金を簡単に手に入れることができたとしても、いったいその金をどうするつもりなのか、むしろ幸福の問題はそれをどうするかということにかかわつてゐる。われわれの問題の重点はそこにある。したがつて、金を発見する知識というものは幸福の条件とは考えられない。」……と。（「エウテュデモス」）

六、おわりに

一般に他人に自分を紹介する場合「わたしは宗教家だ」というより「信仰家だ」という方が、なんとなくひけ目を感じたり、それに抵抗をもつものだ。これは信仰家というものがない、そんなひ弱な人の代名詞のように悪たれを言われている。今回テーマに挙げた仏教の現代化を考える場合、むしろ私個人はつよい人間だとおもふ。これは唯単にもの強弱とか自主性の有無といった問題だけではなく、次にあげるようないくつかの特性をもっている証人ではなからうかと考えている。

その一つは、信仰者とは愛（慈悲）の人ということができる。それは男と女の愛のように相手の価値を認めてそれを受するというのではなく、愛すべき価値のあるなしは別として、いやむしろ相方にたとえ価値がなくともいい、まずその人を愛することによって彼のなかに何にも代えがたい価値を見出してゆくようなそんな愛の持ち主ということだ。

もう一つは人間の苦をわきまえこれを超えた人物といっている。これは先のハックスウルの論法だが、今日の西欧

医学は人間を苦しめている病苦をできるだけ早く、その病原菌をさがし出してそれをばくめつし除去することによって、その苦痛から解放しようとするものであつて、こうした科学至上主義に対立し、その病苦のもつ意味を考え直してみようとするものである。しかもそこから人間の魂のすくいの問題にまで至らせようとする新しい人間医学への提唱だ。

こうしたみせかけの健康ではなく、真の健康という彼の主張は、今日の社会福祉の領域でも同じことが言えるのかも知れない。人間の健康には大変な関心をもちながらも自らのそれについてはほとんど無頓着でいられるといった様もそれに属していよう。差し当り仏教社会事業はその現代的使命を担いながらも現代病といおうか文明病の特徴である無症状に虫ばまれているその人々の痛さを忘れてはならないのだ、それを忘れて知識・学問の殿堂と化してしまいい増々科学化の方向に向って航海していると言えないだろうか、よしんば後進性といわれようが、人間が人たる魂の問題に対してある安らぎを与えるような社会人に対する貢献と奉仕者としての活躍が一層期待されるものとおもふ。

佐伯氏の引用を最後にあげてその結語としよう。

「もし大学教授ならびに学徒諸君がこれらの不幸なる無産大衆をみずして、大学の年俸によつた学問のきりうりのみを革とする者は決して真理をつたえる学者たる態度でも、人格的な立派な存在でもない。また学徒においてもその時代の心臓のどよめきわたる社会と接することな

くしては、その理論は常に空論に終わるであらう。……この意味から街道の大学を望む。」と「金ではなく人間が第一の担い手」であることをお互いに自覚したいものだ。新しい路を切り開くために。

(仏教大学助教授・社会福祉学)

法爾というは、この如來の御ちかいなるがゆえにしからしむを法爾というなり。

【解説】 ヨーロッパ人にとっては、自然とは自己に対立するものであった。ここから主観と客観の区別は生まれ、自然を改良する、自然を利用する、さらに自然を征服するという考えまでを産んだのであった。この考え方にみちびかれ、ヨーロッパ人は、自然を客観的に処理し、分析する方法としての科学や、その技術、実験を設けたのであった。このような考え方の対極に立つのが、東洋ことに仏教の自然観であった。インド人のもつ自然と人間との一体観（梵我一如説）は、仏教においても基本的には継承され、さらに自然の中にこそ真実と仏とがあるという考えにまで高められるに至っている。

(親鸞「親鸞第五書簡」金岡秀友著「仏家名言辞典」東京堂より)